

## 『大阪一都市の記憶を掘り起こす』を読む

写真は加藤政洋さんのちくま新書。2019年4月に出版された頃に読んだが、大阪に馴染んできたので再読した。コロナ禍の腰痛で、あまり街歩きができないので、地理学者と大阪の街を歩くことにした。

表紙カバー裏から一キタとミナミの違いとは何か？ 梅田の巨大地下街はどのように形成されたのか？ 2025年万博予定地「夢洲」の暗い過去とは？ 梅田、船場、アメリカ村、飛田新地、釜ヶ崎、新世界、法善寺横丁、ユニバ、夢洲……気鋭の地理学者が街々を歩き、織田作之助らの著作を読み、この大都市の忘れられた物語を掘り起こす。大阪とはどんな街なのか？ これを読めば、見える景色はからりと変わる。

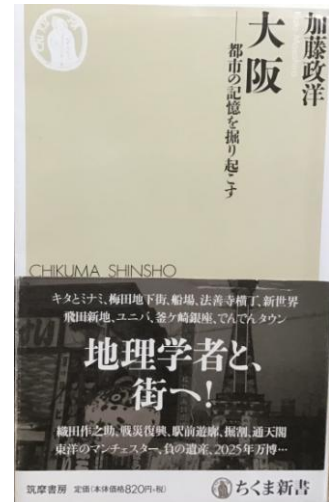
本書から大阪という「都市の記憶を掘り起こす」ことができたが、とりわけ写真の阿倍野から法善寺横丁・黒門市場あたりが興味深かった。「近世大阪の南端に位置した遊郭一墓地一木賃宿街という空間的三つ組みが、タイムラグをはらみながらも、そろって近代大阪の南郊に移動し、機能的にはそっくりそのまま再現されたのである。周縁性を帯びた空間の移転先として、既成市街地からみれば、近からず遠からずの近郊が選択されていたのだ。」

今から50年前、大阪で大学院「浪人」をしていた。大阪市大近く杉本町での下宿生活。道頓堀や阿倍野界わいを散策し、立ち飲み屋で「ちょっと一杯」が楽しみだった。そんな若き頃の思い出が、大阪という都市の記憶と重なり合う。

ほかにも関心のある地域は多いが、写真下2枚だけを紹介しておく。うめだの地下街コンコースの円柱に寄せるように荷台を設け、新聞を販売している。なんだか記憶に残っている。ここは地下鉄御堂筋線「梅田駅」前で人通りが多いところだ。いつも歩きながら、ぶつからないか心配になる。今は新聞を買うときはコンビニだが、夕刊は手に入らない。こんな形で新聞を販売してくれると嬉しいのだが。

もう一枚は、コンコースの近く JR 大阪駅に上がる階段前の立ち飲み屋「松葉」。狭い空間に割り込んで、串カツとビールを楽しんだことがある。こんな地下街の

「原風景」も大阪という都市の記憶である。また街歩きに出かけたたくなった。



(2021年5月30日)